新春インタビュー

富県躍進！“PROGRESS Miyagi”

～多様な主体との連携による活力ある宮城を目指して～

安東（あんどう）　理紗（りさ）さん　インタビュアー　×　村井（むらい）　嘉浩（よしひろ）　宮城県知事

Q　新年を迎えました。昨年を振り返って、どのような1年でしたか。

A　昨年はイベントの多い年で、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会や第40回全国豊かな海づくり大会～食材王国みやぎ大会～がありました。全国豊かな海づくり大会では、天皇皇后両陛下にオンラインで御臨席賜ることができました。

また、3月11日には東日本大震災から丸10年を迎え、被災者の方々にとっても宮城県にとっても節目の1年だったと感じています。

Q　それらの全てに新型コロナウイルス感染症が大きく関わっていたと思います。本当に大変な1年だったと思いますがいかがですか。

A　震災では、発災直後が最悪な状態で、その後は少しずつ前に進んでいるという手応えを感じることができました。しかし今回の新型コロナウイルス感染症は先が見通せないため、どこがピークなのかが全くわかりませんでした。手探りで先が見えない不安な状態がこの2年間継続しています。

Q　そんな中、ワクチン接種には素早い対応だったという県民の声もありましたね。

A　ワクチン接種については、結果的に政令市を抱えている都道府県の中では接種率が上位に位置していると思います。そして、何よりも新型コロナウイルスに感染した方の死亡率が宮城県は非常に低いです。これは本県が誇ってよいことだと思います。

Q　新型コロナウイルスに関しては今後どのように付き合っていかなければならないと思いますか。

A　新型コロナウイルスを撲滅することは不可能だということを前提に考えるべきだと思います。

まずは、3回目のワクチン接種を希望する方全員に早く接種し終えるようにすること、また、治療薬が開発された場合には、患者さんに速やかに届くようにすることが重要です。それでも大きな感染の波がくるかもしれないので、病床や療養ホテルをしっかり確保できるようにしておくことが大切だと思います。

Q　新型コロナウイルス感染症が落ち着くと今度は経済の回復が求められると思いますが、そのあたりはいかがでしょうか。

A　コロナ禍によりホテル・旅館なども含めた旅行業界、そして飲食業界の売り上げが非常に落ち込んでいます。特に宮城県は第3次産業であるサービス産業が経済の中心になっているので、そこがダメージを受けるということは県の経済全体がダメージを受けることになります。その回復のためには、旅行キャンペーンや食事券といったカンフル剤になるような緊急的な財政措置をしながら、長期的なスパンで観光客が戻ってくるような施策を考えていかなければならないと思います。

また、今年は宮城県制150周年の節目の年です。これを一つのきっかけとして、たくさんの観光客を呼び込んでいくために、早め早めにプロモーションを進めていきたいと考えています。

真っ暗な中にあっても、小さな明かりが見えれば希望が持てます。私の役割は、その明かりを見えるようにすることだと考えています。

Q　昨年開催された東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会では、コロナ禍の難しい状況下で有観客での開催でしたが、これについてはどのように考えていますか。

A　結果として、関係者の皆さん、観客の皆さんのご協力で無事に終えることができましたし、「ボランティアなどで活動することができてよかった」と言ってくださる方もたくさんいましたので、難しい決断ではありましたが、私は有観客で開催してよかったと感じています。

また、観戦会場には子ども連れのご家族の姿も多く見られ、子どもたちがオリンピックを現地で実際に見ることができてよかったと思っています。私は前回の東京オリンピックの時に4～5歳だったのですが、白黒テレビの前で両親と一緒に応援したことが今でも記憶に残っています。こういった思い出は子どもたちにとってとても大切なことだと思います。

Q　今回の大会では、復興を全世界に発信するという目的・目標がありましたが、その点はどのように感じていますか。

A　今回のオリンピックは復興五輪という大きな理念がありまして、世界の皆さんに感謝の気持ちを伝え、オリンピックを開催できる状況にまで復興したということをコロナ禍でもお見せしたいと思っていました。

残念ながら海外からのお客さんはほとんど来られませんでしたので我々の気持ちを直接お伝えすることは難しかったのですが、そういう気持ちを持ってお客さんに接しようという県民の皆さんの気持ちはひしひしと伝わってきました。特にボランティアの皆さんが、雨が降っても傘をささずにプラカードを持ってご案内している姿を見て、感

謝やおもてなしの気持ちがにじみ出ていることに感動しました。

今回の大会の復興五輪という理念を少しでも県外の皆さんに感じていただくことができたら、それでよかったのではないかと思います。

Q 東日本大震災から10年が経過しましたが、どのような10年でしたか。

A 国や市町村、県民の皆さんの力があって復興は着実に進んできたと感じています。震災直後は何から始めたらよいかわからない状態の中で、優先順位を付けてどんどんやっていかなければなりませんでした。復興を進めていく中では、フェーズごとに課題も違います。その課題を一つ一つ解決していくことにより、ハード整備は今年度にはほぼ終了するだろうというところまでやってまいりました。こちらは予定どおり進んでいると思います。

一方、心のケアやコミュニティの再生など、ソフト面では10年経過して新たな課題が出てきていると思います。

Q 具体的にどういった取り組みでソフト面のケアができると思いますか。

A こうすればよいというのは被災された方それぞれ異なると思います。一人一人聞いていくしかないのですが、それを国や県、市町村が全て担うというのではなく、それぞれが自身の役割を自覚して、頼れる人に少しずつ頼って皆の力で総合的にケアをするということが最善だと思います。

Q ソフト面では、福祉や教育などでも新たな課題があると思いますが、いかがでしょうか。

A 今後、宮城県の人口は230万人から25年間で180万人減るといわれています。また、65歳以上の高齢者は増え続け、ピーク時には県全体で1割くらい増えるとされています。そうなると、税収は減少する一方で、社会保障費は上昇していくことになります。

今後、県が持続的な発展をしていくためには、民間の力をお借りしながらスリムな行政体にして、少しでも余裕ができた部分を社会保障費に回すことが必要です。

今年度スタートした「新・宮城の将来ビジョン」はそういったことを見越して、急激な人口減少を抑えながら宮城を発展させていくということに取り組んでいくものとなっています。

Q 宮城県は合計特殊出生率も低いですよね。

A そうですね。全国で一番低いのは東京都ですが、子どもを持つ若い人がどんどん入ってくるので子どもの数は減っていません。「少子化＝人口が減る」わけではないので、そのような社会づくりが重要だと思います。もちろん子どもを生み育てやすい環境づくりは非常に重要な課題ですので日本全体としてはそうしなければなりませんが、宮城県に若い人が入ってくるような施策を行うことによって東京都と同じような効果が得られるような取り組みも必要だと思います。

女性が働きやすい環境づくりも重要ですね。保育所をつくればよいという問題でもありません。女性が子育てをしながら働きやすい環境になるように取り組んでいかなければならないと思います。

また、少子化対策をしたとしても、子どもが大きくなったら宮城県から出て行ってしまっては意味がないので、子どもを生み育てやすくし、働く場所をつくる、そして若い人が入ってくるようにするというように全体的・総合的に行っていかないと人口減少は抑えられないと思います。

それから外国の方についても、労働力としてだけではなく、宮城県に来て我々の文化・伝統を理解して一緒に生活をしてくれるような方々をどんどん増やしていくことが重要だと思います。

Q たくさんの課題を抱えている中でストレスも溜まるかと思いますが、どのように解消されていますか。

A 食べて寝ること、その他には本を読んだり音楽を聴いたりすることでストレスを解消しています。食べて寝るということは本当に重要だと思います。体力の低下を感じることも無いわけではありませんが、なるべくストレスを溜めないようにしています。

Q ご自宅で餃子を作ったりなど、料理もされていますよね。そういったこともストレス解消になるのでしょうか。

A そうですね。料理もたまにします。関西人なのでお好み焼きなどの粉物も自分でつくります。

また、ルームランナーで30分から40分くらい、時速6キロくらいで歩いています。家系的に血圧系の病気になりやすいので、血を巡らせた方がよいと思って行っています。

Q 5期目がスタートし、新春を迎えました。県民の皆さんへのメッセージをお願いします。

A 今年は県制150周年という非常に大きな節目の年ですので、皆でお祝いをしたいと思います。コロナで大きなダメージを受けましたが、県民の皆さんが笑顔になれるように努めていきたいと思います。

明るい2022年になることをお祈りしています。

インタビューを終えて

私が入社した2005年から「宮城の顔」として走り続けてこられた村井知事との対談で緊張しましたが、「おいしい餃子の焼き方」伝授などサービス精神あふれるトークで、和やかな時間となりました。

新型コロナウイルス感染症の収束、震災からの復興など、引き続き課題も多い中、「女性も働きやすい宮城県の実現」にも力を入れると語ってくださり、心強く感じました。

今年は県制150周年の節目ということで、明るい話題が増えることを祈っております。

村井　嘉浩

大阪府豊中市出身。防衛大学校を卒業後、陸上自衛隊東北方面航空隊にヘリコプターパイロットとして配属される。1992（平成4）年松下政経塾入塾、1995（平成7）年から宮城県議会議員を務め、2005（平成17）年11月から宮城県知事に就任。現在5期目。

安東　理紗さん

東北放送アナウンサー

《テレビ》

- ウォッチン！みやぎ（木曜日担当）
- ひるまでウォッチン！（木・金曜日担当）

《ラジオ》

- en∞Voyage（水曜日担当）